関係的な知識とその共有
―アマゾニアにおける環境 NGO とローカルな人々、そして森林―

大阪大学　人間科学研究科　博士後期課程
神崎隼人

本発表の目的は、アマゾニアにおける知識の共有を検討することである。そこで、ペルーのある環境 NGO とローカルな人々とが出会う場に焦点を合わせたい。そうした場では、持続的な農業の技術・畑と場所・精霊の在り方といった、それぞれ異なる環境の関する知識や実践が混ざりあっている。

世界を表す言語ではなく、人やモノの様々な連鎖が知識を制作する［ラトゥール 2007］。ブラジルのカヤポの人々はサバンナ状景観にパッチ状に広がる林を作り出し維持していた［Posey 1985］。また、マデイラ川沿岸では先コロンブス期の人々の生活が生み出した豊かな土壌の堆積を、時を隔てて移民が利用している［Kawa 2016］。このような事例からは、知識は実践を通じて環境の中に具体性を有し、また人々同士はこの知識を、意図しているか否かに関わらず共有し得ると言える。知識は、人々、実践、環境が互いに結びついたプロセスである。ラッフルズは、ある環境における実践を通じて人々が他者そして環境を知っていくプロセスを、インティメートな知識（intimate knowledge）と呼ぶ［Raffles 2002］。

この概念を手掛かりに事例を分析する。フィールドは、ある換金作物を導入するよう環境 NGO が先住民や移民の人々に働きかけている、ペルーのウカヤリ川の支流の地域である。

先住民のある家族が、現金収入が向上し「役にたった」と語るにも関わらず換金作物の栽培を突然放棄した。NGO のスタッフは困惑した。彼が言うには、先住民にプロジェクトや栽培の知識を理解させるのは極めて困難であり、時間のかかるものである。その一方、放棄した理由を先住民の一人は「高さ」のせいで畑が遠いからだとする。ここでは両者の間で、現場の環境に対するインティメートな知識が異なっていたという観点で考える。

共有されているインティメートな知識も存在した。移民家族の夫婦は、トゥンチと呼ばれる森の精霊について話し合っていた。「ヒュ～」という音が聞こえて、吐き気・硬直・悪寒が身体に生じるとき、彼らはトゥンチに出会っている。先住民の親族を持つ NGO スタッフの男性は音を聞いたことがある。これは例えば人類学者が「住民はトゥンチの存在を信仰している」と処理するような知り方とは異なっている。「聞く耳」を持ってその環境の中に生きていることで、彼らはインティメートな知識を共有している。

このようにインティメートな知識という観点から考えると、この場において知識の共有は、マテリアルな環境の中での実践の共有・環境と身体の連続性のあり方の共有の双方からアプローチするべき問題であることが見えてくる。

参考文献

Kawa, Nicholas C.

2016 *Amazonia in the Anthropocene: People, Soils, Plants, Forests.* Austin: University of Texas Press.

Posey, Darrel

1985 Indigenous Management of Tropical Forest Ecosystems: The Case of the Kayapo Indians of the Brazilian Amazon. *Agroforestry Systems* 3(2):139-158.

Raffles, Hugh

2002 Intimate Knowledge. *International Social Science Journal* 54(3): 325-335.

ラトゥール、ブルーノ

2007 『科学論の実在―パンドラの希望』川崎勝・平川秀幸訳、産業図書。